

m で SW 向に 30° の傾斜をなした安山岩上で 30×30 cm の方形枠 5 個をとって、優占度をしらべた結果は次のとおりである (写真参照)。

<i>Gyrophora torrefacta</i>	3	3	3	3	3
<i>Rhizocarpon geographicum</i>	3	3	3	4	4
<i>Lecidea</i> sp.	2	3	2	2	1
<i>Lecidea</i> (?) sp.	2	2	2	1	2
<i>Stereocaulon nabewariense</i>	•	1	r	r	r

このアナイワタケの群落に随伴するものは、このように固着地衣を除いては少ないが、所によっては *Parmelia stygia* Ach. タカネゴケが小集団をなしている。なお、表に出てくる *Rhizocarpon geographicum* (L.) DC. (f. *atrovirens* (L.) Mass.) チズゴケは、久住山では 1350m 内外から頂上まで出現して目につきやすいが、これも九州からは今までに確実な記録はなかった。この地衣は祖母山にもあり、約 1600m 以上の岩上には稀でない。*Parmelia stygia* も九州では未記録のものである。

以上要するに、現在では九州に産することが確実なイワタケ科の地衣は 2 種だけということになるが、今後ほかの種類が見出されることは期待できる。

終りに *Gyrophora torrefacta* の同定につきお教えくださった朝比奈泰彦先生にあつく感謝する。(高知市朝倉、高知学芸高等学校・高知大学教育学部)

\*            \*            \*            \*            \*

Umbilicariaceae in Kyushu comprises only two species, i.e., *Gyrophora esculenta* Miyoshi and *G. torrefacta* (Light.) Cromb. *G. torrefacta* collected on Mt. Kuju (T. Yamanaka, Aug. 6, 1962) is new to the lichen flora of Kyushu.

□ 亘理俊次：写真集第 3 巻，図版色刷 12 共 186，植物種数 90. XI, 1962. 第一法規出版会社。¥3,000 本書については既に紹介済みで、ここで紹介するものはその第 3 集で、次の植物がとり上げられている。バラ、ハマナス、ノイバラ、オオダイコンソウ、ミツモトソウ、ヘビイチゴ、ヤブヘビイチゴ、オランダイチゴ、カジイチゴ、クマイチゴ、ナワシロイチゴ、クロイチゴ、キンミズヒキ、シモツケソウ、ヤマブキ、ワレモコウ、ヤマブキショウマ、シモツケ、コデマリ、コゴメウツギ、シロツメクサ、フジ、ムレスズメ、エンドウ、ソラマメ、インゲンマメ、ナンキンマメ、ナタマメ、フジカンゾウ、ジャケツイバラ、オジギソウ、ホソバノキリンソウ、クロクモソウ、ユキノシタ、チャルメルソウ、タキミチャルメルソウ、ウツギ、ウメウツギ、コアジサイ、ガクアジサイ、アジサイ、トベラ、マンサク、ヒュウガミズキ、ツルウメモドキ、マユミ、マサキ、ニシキギ、モチノキ、ドクウツギ、ツゲ、フッキソウ、クロタキカズラ、ツリフネソウ、ホウセンカ、フシグロセンノウ、フシグロ、カワラナデシコ、ナンバンハコベ、ウシハコベ、マツバボタン、スベリヒユ、ヤマゴボウ、ヨウシュヤマゴボウ、イノコズチ、ケイトウ、ムラサキツユクサ、ツユクサ、ヒガンバナ、スノードロップ、スイセン、ニワゼキショウ、ヒオウギ、ノハナショウブ、アヤメ、イチハツ、シャガ、コムギ、オオムギ、ライムギ、カラスムギ、ジュズダマ、イネ、トウモロコシ、ゼンマイ、オニゼンマイ、ヤマドリゼンマイ、イヌスギナ、スギナ、トクサ。以上には若干珍しいものも含まれている。たとえばクロタキカズラの花の写真などはタキミチャルメルソウとともに珍中の珍といえる。けれども、普通なもの気づかないところを形態学的視野から実によく捕えていて、この点一般の図鑑などは及ばない上、さらに芸術的にもよくこなしている。(久内清孝)

□ Weisz, P. B & M. S. Fuller: **The science of botany**, 24 cm×22 cm, 562 pp. McGraw-Hill Book Company, Inc. (1962) 内容も新しく、しかも蜀期的なすじの通し方で編まれ、それにふさわしい装釘と挿図とで強調された植物学の教科書である。著者の一人 Weisz は 3 年前に *The science of biology* を書いた。そこに盛られた思想と体系とが全体にわたり文章が同じ所さえあるが、さすが 3 年の時日に多くの点で改善のあとが著るしく、前著でみられたどぎつさは適度に消去され、順序も一層よく整頓され、内容は 6 部に分かれている。はじめに序章「科学の本質」を設けて、科学の起原からはじめて方法と限界について論じ、ついで第 1 部「生命の世界」では先ず生命の起原を 7 段階に分けて理解する事から導入し、細胞とその構造、組織、器官、種から群落へと高次へ進めて行きつつ基本構造と体制をのべる。第 2 部は「植物の世界」で分類に重点をおき核のない Monera の群、光合成をする Protista 群（藻類）とそれをしない Protista 群（菌類）、後生植物（Metaphyta）（コケ類以上）に分けてのべる。管束のある群を再説するあたりは少々整頓が悪い。第 3 部は代謝系（metabolism）で、植物の栄養、光合成、エネルギーの開放、エネルギーの利用の各章。第 4 部以下では自己保存（self-perpetuation）として生物の現象を把握する立場をとり 3 つの大きな型を認めている。生体の内外の保持のための基本機構として第 4 部は *The steady state* と題し、刺激、フィードバック、酵素、ジーン及び DNA 等の情報伝達、生長促進物質、運動、花成等を扱う。第 3 部と共に著者の力を入れた所と思われる。第 5 部は自己保存の第 2 型として個体を超える方法として「生殖」を扱う。分子の復生から論を進めて染色体の分裂に入り、ついで *organismic reproduction* となる。栄養生殖（vegetative reproduction）、孢子生殖（sporulative r.）、配偶子生殖（gametic r.）と 3 つの基本をみとめる根本見解は従来の有性・無性の機械的な整理にくらべはるかにすぐれている。生活環についても表示は要領がよい。各群毎に代表的な生殖形態を生活環との関連でのべ、高等植物に及べば当然胚形成の段階にくるので、つづいて形態形成に引き込んで行く運び方もうまい。第 6 部は自己保存の積極面として「長期間の適応」を表に押し出す。まず遺伝に入りついで進化に及ぶ。この章はいささかお粗末であるのは惜しい。末尾に気のきいた親切的な分類表と用語解がある。分類表は被子植物の目の排列が Engler のままであることを除けば中々モダンである。裸子植物がシダと並んで 1 つの綱にすぎず、トクサ類よりも低い群だという扱い方が教科書にまで入って来た。以上を通じて多少の精確はあるが新しい問題をよく捕え、従来とは異なった考え方と記述法に立つこと、即ち分子のレベルから入ることが進化を基本とする生物の理解に最も適しているとする見解が一貫している点、異色であると共に将来指導的になると考えられるので少し長く抄録し紹介をした次第である。\$ 8.95 は少々高いが大学教養課程の学生諸君や高校の生物担当の先生方に一読をおすすめしたい本である。と同時にこの雑誌の読者のような分類愛好家も分類の基盤の背景と前景として本書程度の植物学ことに生理学方面の理解は出来ていなくてはなるまいと思うものである。（前川文夫）